



TITLE:

<Book Review>Enke, Stephen,  
Economics for Development,  
Prentice-Hall, Inc., Engelwood Cliffs,  
N.J., 1963,pp.xxii+611

AUTHOR(S):

本岡, 武

---

CITATION:

本岡, 武. <Book Review>Enke, Stephen, Economics for Development, Prentice-Hall, Inc.,  
Engelwood Cliffs, N.J., 1963,pp.xxii+611. 東南アジア研究 1963, 1(2): 78-78

ISSUE DATE:

1963

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54802>

RIGHT:

ン発電工事のため、トンゲーから発電所までの間に送電線を建設しなければならない。その送電線の建設のためにトンゲーからロイコーに至る間の道路を建設する。これが、トンゲー・ロードであり、著者はそのため昭和29年の末から5年間この建設に没頭する。insurgents の出沒するカレン州の山岳地帯200kmにわたっての道路建設の consultant engineer としての体験は実にたいへんなものだ。この経験が淡々として、語られている。文章はよく、しかも多数の地図や写真がいっそう読みやすくさせている。まことに興味ある読みものである。

東南アジアにおける土木技術者の仕事がいかにたいへんであるかは、本書でよくうかがえるであろう。それとともに、それがなぜたいへんなのか、その言外の意味がいろいろと考えさせられる。とくに、developing countries における経済計画のありかた、またそこにおける指導者や住民の behavior にいろいろと問題があろう。これだけ苦労して建設したバルーチャン発電所の第1期工事8.4万kwがビルマ経済発展にはたす役割こそ、とくに知りたいと思う。おそらく、わたくしだけでなく、本書を読みおわったあと誰しもが希望するのではなからうか。とりわけビルマが“The Burmese Way to Socialism”を進んでいる今日、いっそうこの建設工事の現実的成果が知りたいものである。(本岡武)

**Enke, Stephen: Economics for Development. Prentice-Hall, Inc., Engelwood Cliffs, N.J. 1963. pp. xxii+611.**

東南アジアの経済開発問題を取りあつかうためには、経済開発理論をかためておかねばならない。

経済開発理論の文献としては戦後20年近くの間に、数多くの出版を見るに至り、経済学において、ひとつの分野を確立するに至っている。

しかし、新刊のデューク大学教授エンケによる本書は、とくに注目をひく。第1にそれは近代経済学の成果を、グラフ、モデルおよびタームをとおして、きわめてわかりやすく、経済開発理論にとりいれている。しかも本書が All the Peasant Cultivators of Asia, Africa, and the Americas, Who Remain the Forgotten Men and Women of Economic Development にデディケートされているように、著者の

多年にわたる現地研究と、そのときに体験した低開発国の農民にたいする愛情とでつらぬかれている。まさしく理論と実践とのたくまざる組み合わせが、ここに見られる。しかも第2に、経済開発にかんする主要問題をもれなくカバーしている。すなわち、第1編の低開発の特徴からはじまり、第2編に開発のための innovation の意味、その innovation を実現するために、第3編では資本の蓄積と投下、第4編では労働の投下、さらに第5編は開発と貿易および援助との関係、最後に第6編として展望をとりあつかう。末尾の文献もよくできている。わたくしは、本書は経済開発にかんする入門書あるいは概説書として非常によくできていると思う。とりわけ、農業問題を強くとりあげていることは、低開発国の現状からして当然であろうが、興味深く思われる。そのなかで、低開発国における経済開発の方向として一挙に工業化を促進するか、それとも農業から固めてゆくかとの問題はエンケ教授の深い関心の問題である。これについては付録Aとして、Review of Economics and Statistics の1962年2月で発表した論文に手を加えた「農業生産性向上をとおしての工業化」が再掲載されている。おそらく、経済開発を具体的に考える場合の根本的問題のひとつであろう。その農業生産性向上についても、農業革新は community development なくしてあり得ないとの主張もまことに同感である。

もっとも、本書は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ等の全世界の低開発国を取りあつかっているために、東南アジアの実情にマッチしない議論も多い。また東南アジアといっても国々によって経済開発の現実やこれからのありかたはまちまちである。この多様性を考えながら本書を読むとき、いかに経済開発が現実の問題として困難であるかを思わせる。いずれにせよ、わたくしは本書は経済開発にかんしてぜひとも一読おすすしたい好著であると思う。(本岡武)

**Johnson, John J. (ed.): The Role of the Military in Underdeveloped Countries. Princeton University Press, Princeton, New Jersey. 1962. pp. viii+423**

比較政治学の分野で、新興諸国と軍部との必然的結びつきが語られるようになってから久しい。しかし、従来はその主題に関するケース・ワークがなされず、も